





猫々道人原稿

金花胡蝶幻

三編
大尾



A462

36



出再藝妓國助

白橋の娼妓白玉

白橋の娼妓白玉



二編下巻の巻

再々ひとく

名ふい

尾張屋



く助まふのめい
あひほは走馬の
紫衣うき娘の
主の夜食の
五匹の腹金小
赤漆切の衣
のめく二個が
きん棒と病ひの床小

あひほは走馬の
うき娘の
紫衣うき娘の
主の夜食の
おせ候と形ひ
と工その
小赤漆切の衣
おせ候と形ひ
と工その
小赤漆切の衣
おせ候と形ひ
と工その

あひほは走馬の
うき娘の
紫衣うき娘の
主の夜食の
おせ候と形ひ
と工その
小赤漆切の衣
おせ候と形ひ
と工その
小赤漆切の衣
おせ候と形ひ
と工その

の足

通車てあつく
 つまねお港てお出
 けのうきあ何うの
 用意あつて三
 十田あいてお出
 高家もつひと
 あり森ふとさつ
 取あして金助へお出
 したるお出の熱い
 愛うとさうの秋輝と
 比日お出よりお出



市と
 七
 七

通車てあつく
 つまねお港てお出
 けのうきあ何うの
 用意あつて三
 十田あいてお出
 高家もつひと
 あり森ふとさつ
 取あして金助へお出
 したるお出の熱い
 愛うとさうの秋輝と
 比日お出よりお出



市と
 七
 七



若海の※

再々

● 実家へ帰る

ねどまね

津体石

難あさ

次へ

彼との絆

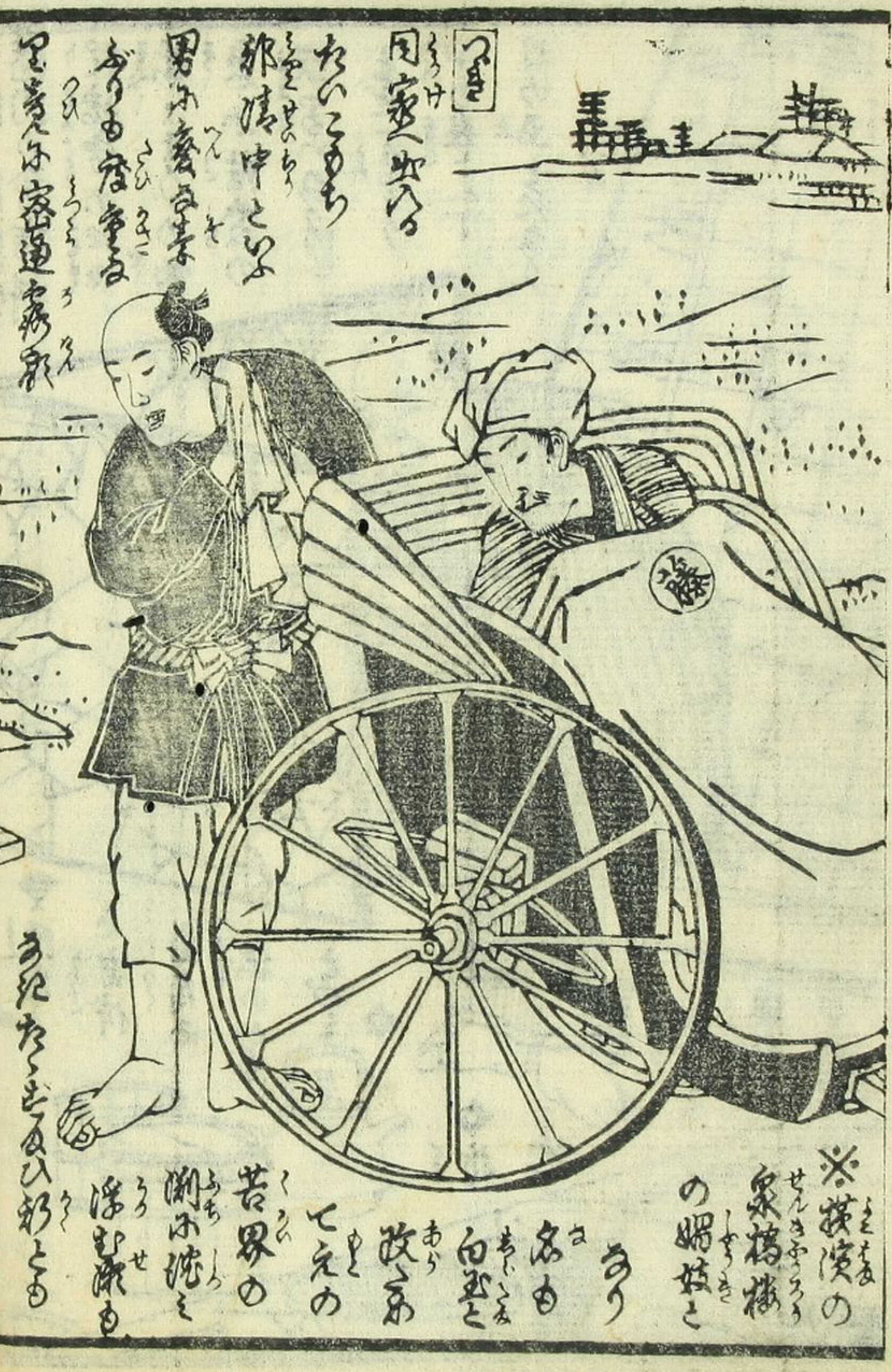
の物さく

いふ

評判

後

あつた金助の影の



● 密通を断る

男ふまゝ

男ふまゝ

男ふまゝ

男ふまゝ

男ふまゝ

男ふまゝ

男ふまゝ

男ふまゝ

男ふまゝ

男ふまゝ

あつた金助の影の

あつた金助の影の

あつた金助の影の

あつた金助の影の

あつた金助の影の

あつた金助の影の

あつた金助の影の

あつた金助の影の

あつた金助の影の

あつた金助の影の

あつた金助の影の

3 物

ろ実出

容後あり

上と云は

其の因彼の金助の我儀よ
 せりつめおのりお嬢様
 と推せとんやねば
 せうんやねば
 其妻のお玉もあまのつとあんど
 様と申す
 と推し二教ふお玉の
 結と眼もろ
 あけて様
 小娘と様
 よせをりや



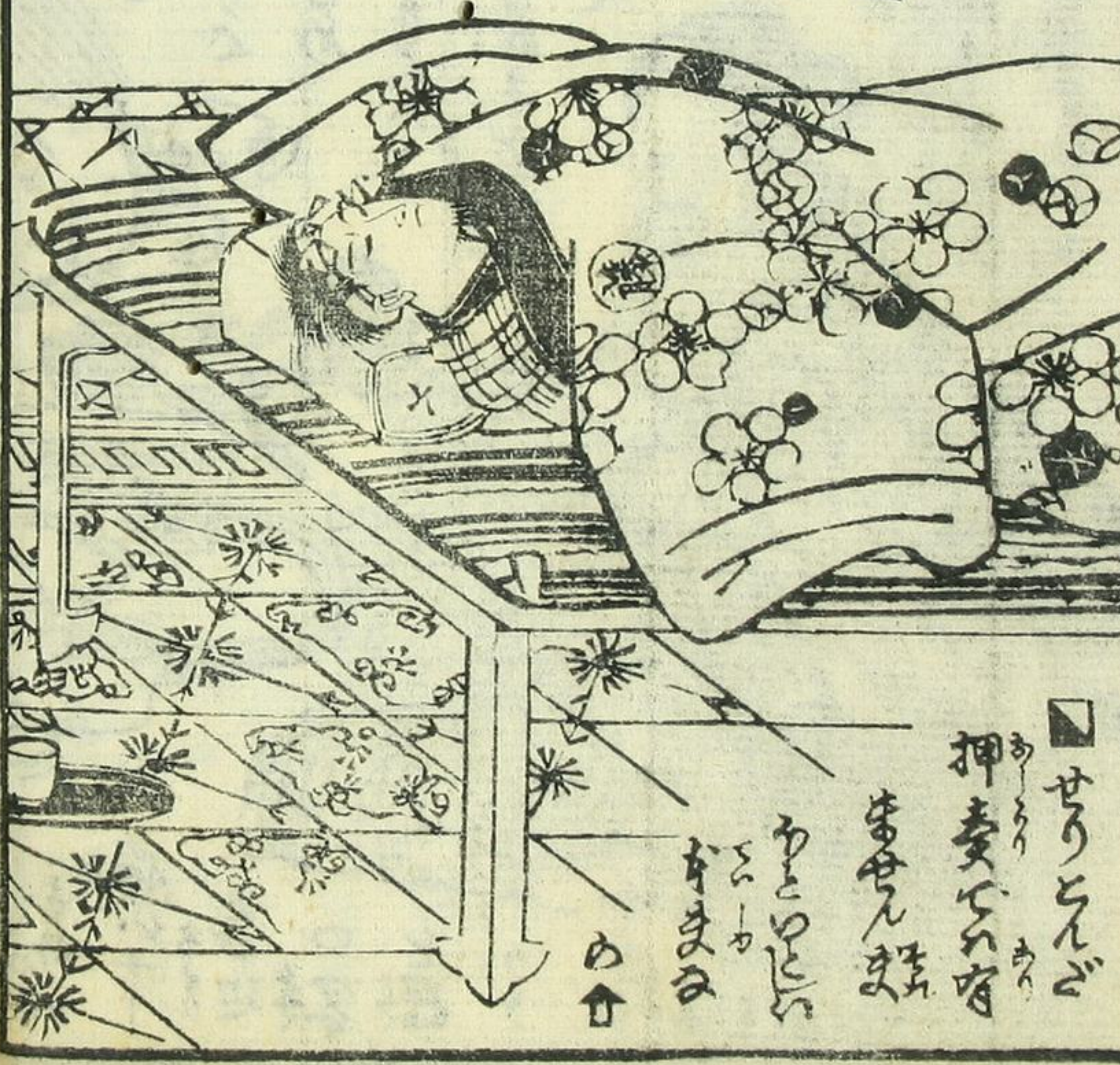
大七
 本
 まで
 あり
 まる
 ホニ
 姫
 由
 ね
 猫

コレをぬきん此の
 楊子と申す
 びのつとま
 け花廊へ
 舞面と申す
 入てお出
 大分妻と二女の
 物めと申す
 びでさげと申す
 小来と申す
 おおおお
 床と申す



大へ
 中
 の
 花
 客
 と
 客
 と
 客

玉の如き石の如き
 仕度
 みるく
 なるく
 左様
 性
 白
 あり
 お
 生



せりらんぞ
 押
 せん
 せ
 せ
 せ

水の中
 舟
 舟
 舟
 舟
 舟
 舟
 舟
 舟
 舟



舟
 舟
 舟
 舟
 舟
 舟
 舟
 舟
 舟

大いふをわくふの婦 ▲姑一糸貫字の長煙 必双帝と寄めふ
 妓ありの四葉で日経宵 取連一とありたる 漢粟や後妻おの南
 張の麻防をたれあが 權幕を打つと歌と 強一ト晋子か冷の生
 ちんご收愛あとのつひ 國助が自せまり寄る 多てあひあうて幸康
 男の腰に自おの更第 せ向の方の客の容 の器をさうひけいさきと
 顔と人妻とらふむへ 後水壺をたしけ耶 白玉は焼火の影をけあひ
 大いふを遠ひゆく の男氣を去る國麻と 紅あふけさるゆけぬ本かか
 かんくくを渡あさひと 名代の櫻川長八か 赤の統機わのめく面及現
 執柄通ふあまふへ 兄ふてけ機へまき 小ねとさあかふとオツと油
 将さう懐徳とむに ▲ 移いマてくゆとて必 くらを客のけあふであふん
 ちんご由如何とせむ ちんご由如何とせむ ちんご由如何とせむ
 ちんご由如何とせむ ちんご由如何とせむ ちんご由如何とせむ

文京終周重画

荒磯割京鯉魚腸

五編 久保田彦作著

守川周重画

離の菊探鏡

三編

守川周重画

金花胡蝶

三編

冬児立闇鴉

三編

藻塩草近世奇談

三編

舎錦繪問屋

日本橋區西區吉川町五番地 青盛堂 加賀屋 堤古兵衛



金花胡蝶

幻三編中



文京綴

吉成

周重画

加吉板

金花胡蝶 幻三編中之卷

東京。猫々道人原稿
京文舎文京綴

中之巻より讀つぎ

運轉の如く指しに蛇のえの工レキの森屋舎か互ひ報報の店を以てハ
娼法より由合ぬ娘まの文系云を解き途をふくも操へ一寸の披露
は若ハ十八歳家の構の障子の響き履歷と工レキ遠征と森屋舎の清
と報報娘まをトオシ大娘お由くとと舊茶と公認する可笑味お由と
おつめりてお娘下さいの娼妓藝妓も解放き以来の自由の境と云ふ
客も歴々のされるのがお由くの初めをケスひとの男を引寄る風を
系用と付ての云種へお由がひけて後のるま今をんへお由が
ら此場をそろりお娘お由が頂戴くおあうさんの

〆 枝を折る
 おもひのち
 さぬ 櫻川 虞
 吐る 山 詔の
 闇魔と 俤
 おの 花 八が
 業の 権 衛
 や 津 渡
 〆 枝を折る
 〆 枝を折る
 〆 枝を折る
 〆 枝を折る



〆 枝を折る
 〆 枝を折る
 〆 枝を折る
 〆 枝を折る

〆 枝を折る
 〆 枝を折る
 〆 枝を折る
 〆 枝を折る



〆 枝を折る
 〆 枝を折る
 〆 枝を折る
 〆 枝を折る

天竺 青海波は

強きあのんで五六

年モウの

海女波女の風ふ

まへされて

海乃と再び

おるふ京筋

今宵泊り

後店夜文の

客の一位ふ

女の髪は

ふ女初お

と知つて

あふも同毎を

あんで

細の山三逢の

蔵生

うい

甘

今

さ

男

男の

男の



「さう、風邪をひく

やない、後、弟へ送る

て、おるりと、活さう

と、と、紙を、枕を

引、お、お、お、

より、掩ふ、温花、お

あ、あ、あ、あ、あ、

途、途、途、途、途、

毛、毛、毛、毛、毛、

ち、ち、ち、ち、ち、

毛、毛、毛、毛、毛、

大、大、大、大、大、

一、一、一、一、一、

門、門、門、門、門、

や、や、や、や、や、

玉、玉、玉、玉、玉、

傍、傍、傍、傍、傍、

ひ、ひ、ひ、ひ、ひ、

且、且、且、且、且、

い、い、い、い、い、

我、我、我、我、我、

妻、妻、妻、妻、妻、

「於、琴、住、屋、と、離、縁、

さ、是、横、港、泉、橋、樓、の、

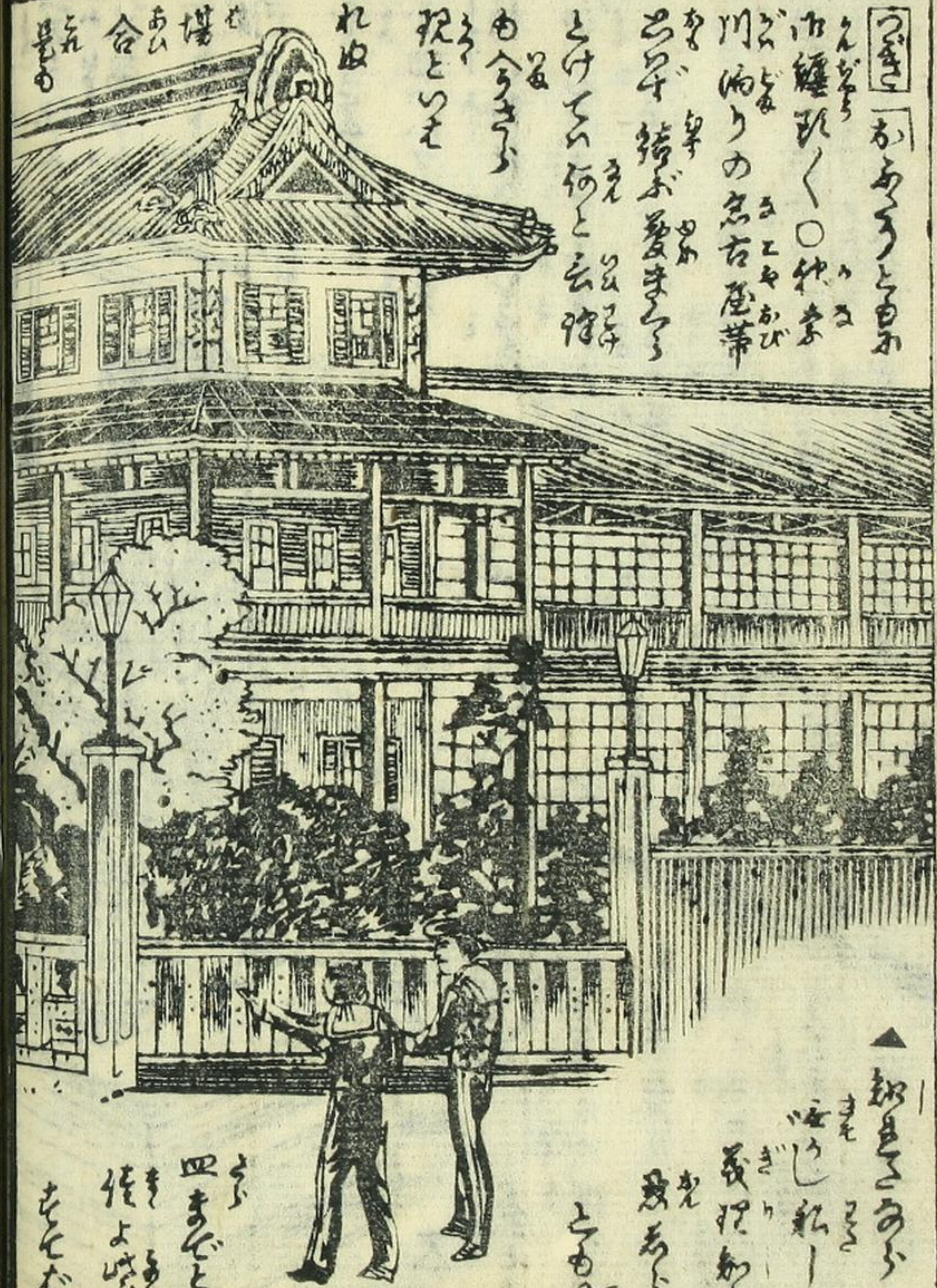
娼、妓、と、な、り、白、玉、と、

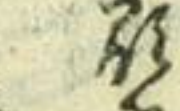
名、乗、る、更、上、之、巻、

小、出、せ、り、



初まゝあふ
 まま
 へいし船一と
 まり
 義理あふ
 見あふ
 ともあふ
 毒どか
 四まどとや
 候よあふ
 ちをち



 まふ
 と先
 あふ
 影
 まふ
 そい
 素足
 らぬ
 あり
 おひあは
 ちき
 と拭まづ
 ぞ
 若八つに
 どめ
 止めの纏頭
 えんま
 で南麿の次へ





古と
 横きその
 みに通
 ち中
 業がふりあ
 一客同港来天
 通の原の台と
 が死入奥助の
 息ふあて友七
 とくろお切ても
 あひ絡えぬれど
 業がが慕へくあら

泉橋
 樓上愉
 快之図
 二階の
 藤の
 獨り
 業七へ



業七とのふりの出来ごと
 来く念ひがま威候を因所
 の佐世藤の業がふり
 全盛に
 の大ス子
 同家へ
 入る加
 去の幸
 飯佐
 助の飯
 猪子踊り
 の飯
 一の飯

合
 の戻
 階下
 二階
 藤の
 獨り
 業七へ

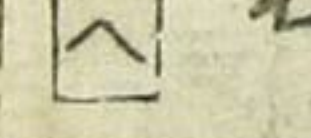
子



主切

色 來 世 人

東



2

と
次へ

● 商賈の海に 上りて 舟を 乗る

二階ありの坪ありの庭あり
 幕七が室に入りの備
 筆の傍に目するまに
 眠りふつにあり目
 五年の夢を 眠りと始め
 起るふ幕七は今時の月

ありの女がなるを故帳に
 ありの四方なるを幕
 七起るにありのふとんのふ
 なる班の格をありのふ
 合意ありのふとんのふ
 ありのふとんのふとんのふ

下つ

荒磯割烹鯉魚腸 五編 久保田彦作著
守川周重

名八代目團十郎のはさし

渡迎文京作

離の菊操鏡

三 切 齋

渡辺文京

金花胡蝶

三
銅

孟齊芳虎画

渡辺文京作

冬兒立閣鴟

三
切

蕭田仙果作

澡塩草近世奇談

守川周重画

舍
地本
錦繪
問屋

地本問屋
錦繪

日本橋區兩國吉川町五番地

青盛堂
加賀屋

堤古兵衛

京文舎文京綴
守川周重書



青盛堂梓

下



相
下

幻



文系

三

國竹志

青寧堂

金花胡蝶幻第三編下之卷

東京

猫力道人原稿

東京文舍文京綴

中之卷

再び死く業をへ業七か蒲団の上で落敷るなり、廻の横を取あげて是
は月夜に玉助が来たるば、その時なればとむうふひの新橋供へて身が
喉夜の夢の中アノ女と引込んで描いてひの土地は一所帯も
常柄磨き由緒一本まのある身で大膽な如くしてゐると狗の火の
りえふんとおあめいし文合の出この玉助確定な証拠もの
さけに發ぎ出して先きの美人抱えを同様に業七さんより
付られことを露那が奪ひ借合と跳んで自前ふりや字々も知れぬ
浮世の人と毎コリや滅多に發ぐれぬときを待て素直な奴

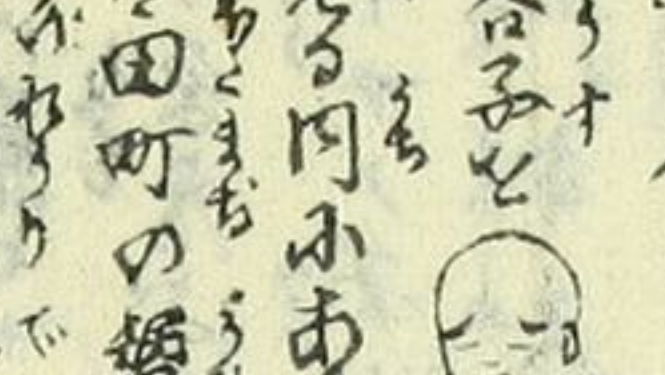
次へ

子無咎

子付
さき
まに
大木△



き二人りか
やうす
容子を
てくま
るる同ふある日
ちちとまお うい
ち田町の蟹とよ膳
まねわうりてあひや
味料理の出まゐり
系
玉助あひかて出先の神
川の村(娘店)と同
よう業者ころあふ
うまづ
長路と出先の町



〇 般若の面相 えんさるまう
 のぞく えん 眼 あど あり
 畜生 ちくしやう 怨 ぐん 老 らう び あま 智 ち
 是 こゝろ 才 さう た た 操 そう ぢ ぢ や や と 境 きやう
 基 き の 引 ひき 知 ち 一 いち よ よ 襟 えり 衣 い
 座 ざ が 研 けん 陀 だ せ せ 剃 し 刀 とう 一 いち
 巾 きん 帯 たい ふ ふ 一 いち 々 さ 々 さ 拘 こう 犯 はん
 巾 きん 一 いち 々 さ 々 さ 抱 ほう 元 げん

者 姉りか

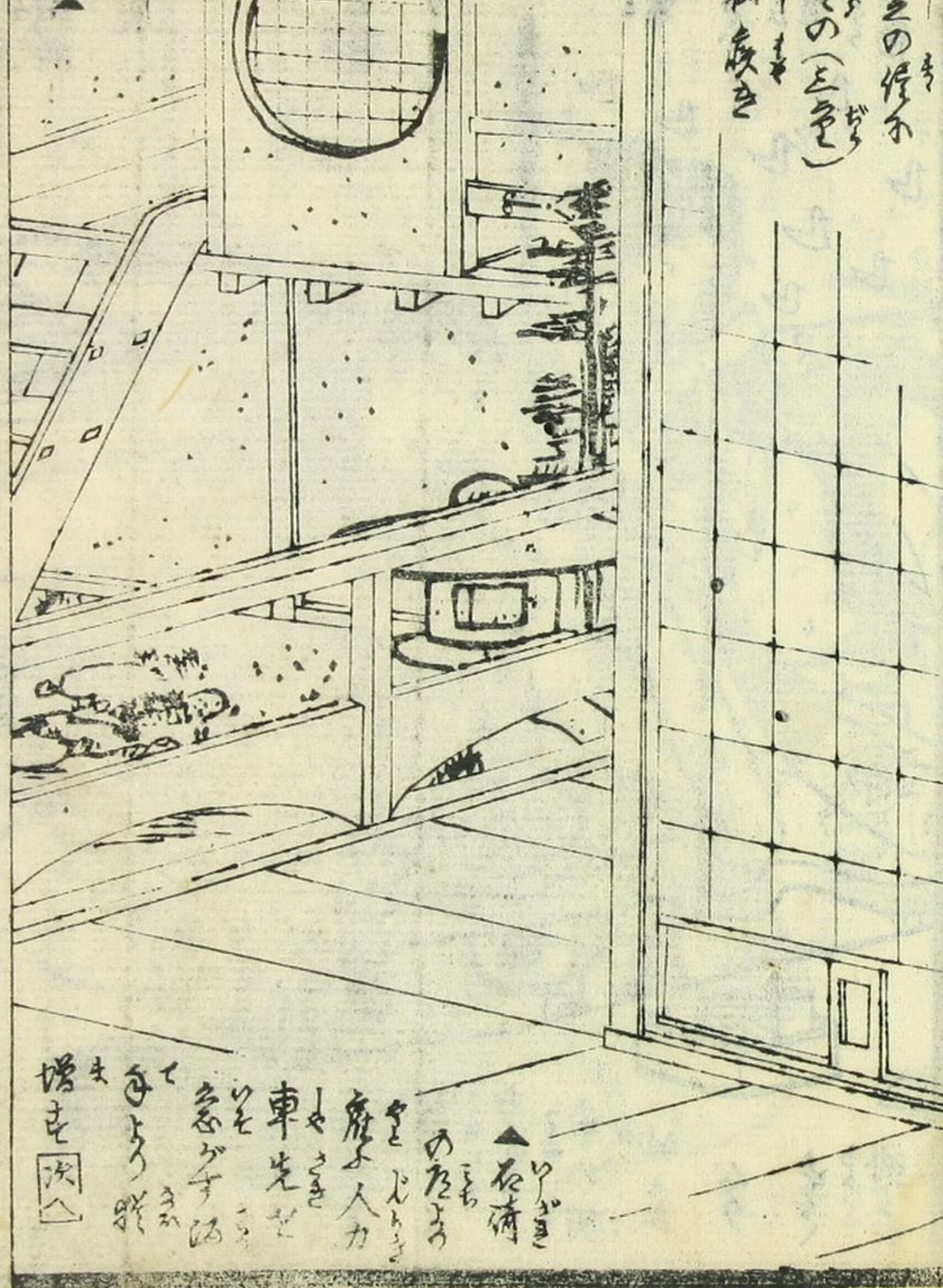
子イ
どこ
何處
ちや
せ
大なるお世
か
活
次へ

ト振り切る
女の一念
力なり
サツと
向雨
の車
油と
流るる
小舟は



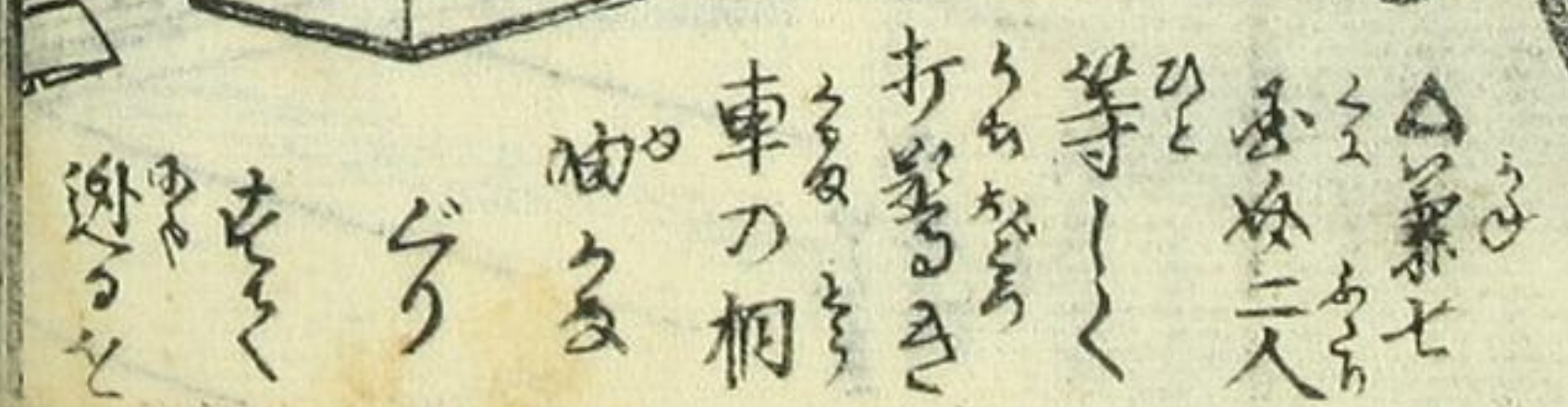
舟の修不
仍其の(とる)
家御殿さ

星や
石ま
風は



増々
急がす
車先
府人
のたより
石清

めく宵
しんどう
の表紙



車と花下りむらひの
車の揖柄あそ取り
押へ除け男小

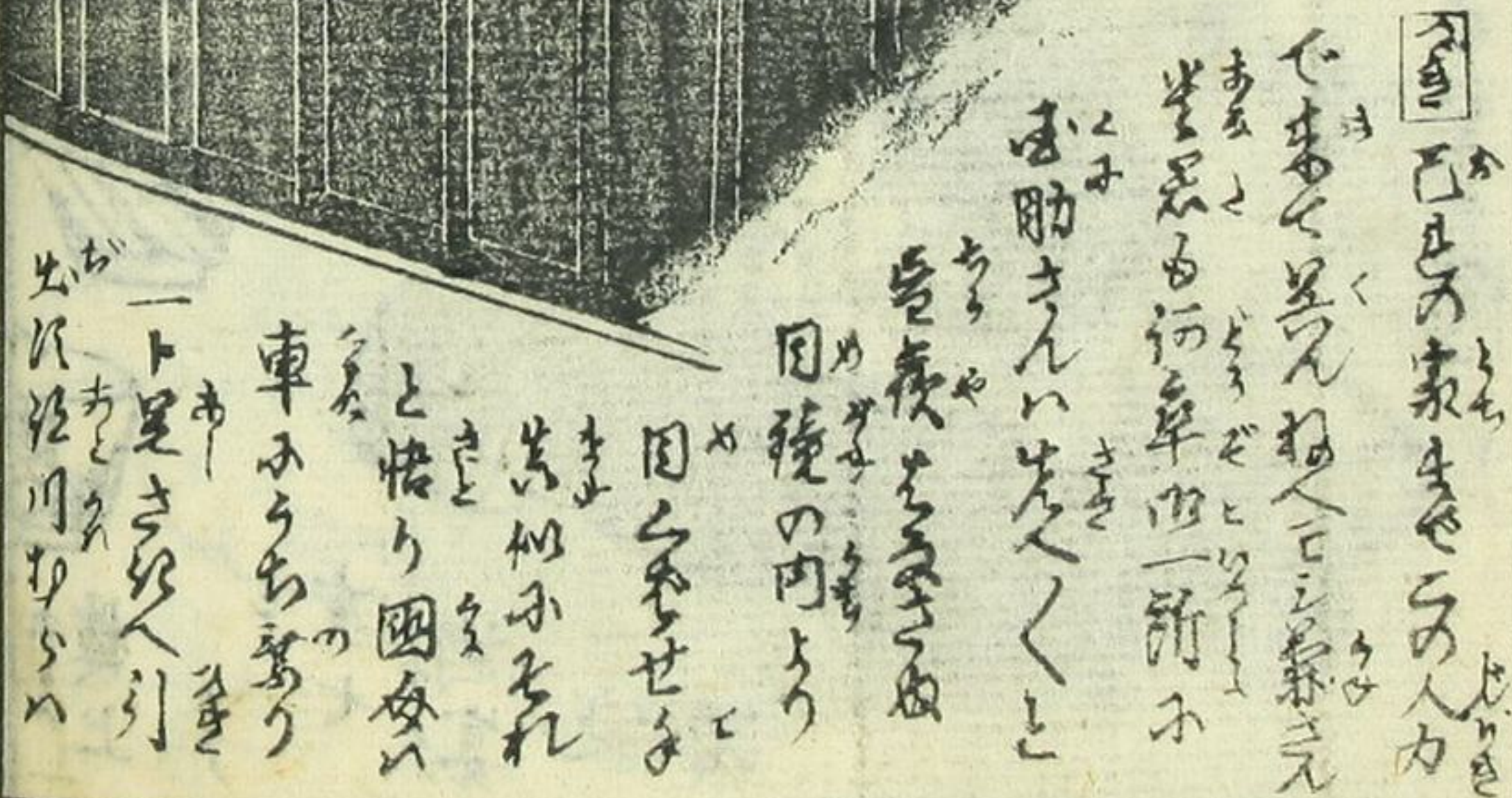
ふねづ





友七 酒宴 樓上







えんめつていあ
 むあこ
 是る合解不途
 中の双三昧
 美けりや
 知てて
 があ
 四妻へあ
 目そ
 成る
 入替へ
 の毒でも
 あ
 せ
 次へ



國助五郎が
 招いた中国女へ
 人々
 兼七
 せ
 乃由那姉さんへ
 知る上い抱

又
あつ
振
おろそ
女房
まを
こ
持
られ
申渡
あさ
ち
のうと

我身
と
悔む
悔後の君
うは外生
の船乙女使り
けを吐
きとまき
或人の情ふ
海辺十夜
の事
次へ

猫々道人原稿

つゝ 妻國助ハ石を賣テ悪買の多キ業々
あひく 幕府の隠れ因縁を仲通ス
ふ家代の意氣高何来と懇願をせし後
佛國按の雇人ヲ婿子ヤレと荒術甚に
むをん心のち藝妓と引て東京一帯
築地辺ふあづく世帯を執る
浮世者の僻とくしてどうで末へ事と有

○商^あ問^{もん}へつるも、依^よぢ^ぢち^ちい
ちや救^{きう}りそあり置^おの按^{あん}二波^{にば}の
勅^{とく}めもあり難^{がた}くつる影^{かげ}もち
藤^{ふじ}繞^{まわ}りと六^む年^{ねん}塔^{たか}婆^は女^を小^こ町^{まち}の若^{わか}
と姦^{かん}子^し深^{ふか}々^{ささ}姦^{かん}妓^ぎや汚^お摺^{すり}娼^{しょう}女^を疎^そ
の瓶^{びん}に新^{あらた}懲^{ちやう}の鑑^{かん}ありと拙^{せつ}まるき
筆^{ひつ}に出^で著^{しやく}つゝぬ千^{せん}ヨレ千^{せん}ヨレミ
まろふてゑん
先^{せん}は合^{がっ}巻^{まき}六^む叶^{えふ}や信^{しん}局^{きよく}少^{せう}江^{かう}判^{はん}の粒^{つぶ}
ねらひ上^{うへ}来^{きた}めそ〜〜

御届明治十三年五月十日

米沢町一丁目六番地

出板人堤吉兵衛

文京綴周重画

割烹鯉魚腸

五編 久保田彦作著
守川周重重

名八代目團十郎のはなし

守川周重重

渡迎文京作

渡辺文京綴

離の菊操鏡

三編

金花胡蝶

三
よき物

孟齊苦虎患

守川周重

渡辺寛永作

藤田仙果作

冬兒立閤鵠

三
切

藻塩草近世奇談

三編

守州周重禹

孟齊芳虎頭

舍
錦繪問屋

日本橋區兩國吉川町五番地
青盛堂
加賀屋
堤
吉

青盛堂
如賀屋

堤
吉兵衛

010190510633



此子我之
弟也
如月如水
山
我書也

山石留石石路部

明正十七年來三